大宰府と漢詩の世界

静永　健（九州大学）

於 日本経済大学 KOROKAN 大講義室

◆都府楼の瓦色――菅公は「ひきこもり」なのか？

（1）不出門　　菅原道真（八四五～九〇三）

一従謫落就柴荊　　門を出でず
萬死兢兢跼蹐情　　ひとたび謫落せられて柴荊に就きて従り、
都府樓纔看瓦色　　万死　兢兢　跼蹐の情。
觀音寺只聽鐘聲　　都府楼は　纔かに瓦の色を看、
中懷好逐孤雲去　　観音寺は　只だ鐘の声を聴くのみ。
外物相逢滿月迎　　中懐は　よく孤雲を逐ひて去り、
此地雖身無檢繫　　外物は　満月に相逢ひて迎ふ。
何爲寸步出門行　　此の地　身の検繫せらるる無しと雖も、
　　何為れぞ　寸歩も　門を出でて行かん。

《参考文献》川口久雄『菅家文草　菅家後集』
（岩波書店・日本古典文学大系72　一九六六・昭和41年）

@なぜ「漢詩」を詠むのか？

（2）【柳澤良一訳】　＊『菅家後集の研究』（汲古書院、二〇二二年）より

「自邸にこもって外に出られない謫居の暮らし」

天子の怒りに触れ、ひとたび配所に流されてこの粗末な家にわび住まいをするようになってからは、わが身に着せられた万死に当たる罪に恐れおののき、身もかがまるような思いで、外出もできない。

都府（太宰府政庁）の高楼は、わずかに屋根の瓦の色を仰ぎ見るだけで、一度も上ったこともなく、（都府楼の近くにある）観世音寺もただ、夕暮れの鐘の音を、はるかに耳を澄まして聴くばかりで、行ったことはない。

しかし門を出なくても、心は自由で、空に浮かぶひとひらの離れ雲が飛び去ってゆくのを、どこまでも追いかけて飛んでゆくことができるし、また、外界の物としては、満月の光が、何物にも邪魔されることなく私をやさしく迎え入れてくれて相逢うことができ、満ち足りた気持ちになる。

この配所の地では、わが身は別に拘束されているわけではないけれど、門を出て少し歩きまわろうかという気持ちになど、どうしてなれるだろうか。

（3）九月十日　　菅原道真（「不出門」と同年の作）

去年今夜侍清涼　　去年の今夜　清涼に侍し、
秋思詩篇獨斷腸　　秋思の詩篇　独り断腸なり。
恩賜御衣今在此　　恩賜の御衣は　今　此に在り、
捧持毎日拝餘香　　捧げ持ちて　毎日　余香を拝す。

＊清涼殿＝天皇の平素の居所。
＊独断腸＝醍醐帝に本日第一番の作品として褒められた？
＊恩賜御衣＝帝からの被け物。

（4）参考→永井荷風（1879～1959）『断腸亭日乗』

菅公没後一〇〇年

（5）藤原公任（966～1041）撰『和漢朗詠集』巻下「山家」／「閑居」

「山家」

554　遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峯雪撥簾看　白

（遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴き、香爐峯の雪は簾を撥ひて看る　白居易「香爐峯下、新たに山居を卜し、草堂初めて成り、偶ま東壁に題す五首・其の四」）

「閑居」

616　鶴籠開處見君子、書卷展時逢故人　白

（鶴籠　開く処　君子を見、書巻　展ぶる時　故人に逢ふ　白居易「門を出でず」）

617　人間榮耀因緣淺、林下幽閑氣味深　白

（人間の栄耀　因縁浅く、林下の幽閑　気味深し　白居易「老来の生計」）

618　官途自此心長別、世事從今口不言　白

（官途　此より心に長く別れ、世事　今より口に言はず　白居易「香爐峯下、新たに山居を卜し、草堂初めて成り、偶ま東壁に題す五首・其の五」）

……中略……

620　都府樓纔看瓦色、觀音寺只聽鐘聲　菅「不出門」

（都府楼は　わづかに瓦の色を看、観音寺は　ただ鐘の声を聴くのみ　菅「門を出でず」）

菅公没後二〇〇年

（6）『大鏡』（巻四・藤原時平伝）　＊白河院政期（1086～1129）の成立。

筑紫におはします所の御門かためておはします。大弐の居所は遥かなれども、楼の上の瓦などの、心もあらず御覧じ遣られけるに、またいと近く観音寺といふ寺のありければ、鐘の声を聞こしめして、作らしめ給へる詩ぞかし、

都府楼ハ纔カニ瓦ノ色ヲ看、

観音寺は只ダ鐘ノ声ヲ聴ク。

これは『文集』白居易の「遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴き、香鑪峯の雪は簾を撥げて看る」といふ詩に、★勝さざまに作らしめたまへりとこそ、昔の博士ども申しけれ。

★（7）醍醐天皇（885～930・在位 897～930）の菅家の詩への言葉（御製詩）

「菅家は白様に勝れる有り」

（8）参考→「摘句」は危険……中国六朝・陶淵明（365～427）の詩句

得歡當作樂　斗酒聚比隣　歓を得ては まさに楽しみを作すべし、斗酒　比隣を聚めよ。

盛年不重來　一日難再晨　盛年は重ねて来たらず、一日は再び晨なり難し。

及時當勉励　歲月不待人　時に及んで まさに勉励すべし、歳月　人を待たず。

（「雑詩十二首・其の一」）

◆◆観世音寺の鐘――「不出門」詩全体の意味

（9）中国（唐）の詩人 白居易（白楽天 七七二～八四六）
＊元和十年（八一五）……江州司馬に左遷。
＊長慶二年（八二二）……杭州刺史に左遷。
＊太和三年（八二九）……太子賓客の職のまま洛陽分司として長安を去る。

（10）香爐峯下新卜山居草堂初成偶題東壁　五首・其四　白居易（江州での作）
香爐峯下、新たに山居を卜し、草堂初めて成り、偶ま東壁に題す五首・其の四
日高睡足猶慵起　日高く　睡足りて　猶ほ起くるに慵し、
小閣重衾不怕寒　小閣に　衾を重ねて　寒を怕れず。
遺愛寺鐘欹枕聴　遺愛寺の鐘は　枕を欹てて聴き、
香爐峯雪撥簾看　香爐峯の雪は　簾を撥げて看る。　↑（5）朗詠集554
匡廬便是逃名地　匡廬は　便ち是れ　名を逃るるの地
司馬仍爲送老官　司馬は　仍ほ　老を送るの官たり。
心泰身寧是歸處　心泰く　身寧きは　是れ　帰る処、
故郷何獨在長安　故郷は　何ぞ独り　長安に在るのみならんや。
＊田舎の草庵でのんびりと暮らしている。寺の梵鐘を布団の中から聴き、雪の香爐峯は小窓から仰ぎ看る。ここでは誰も私の名を知らず、司馬の俸給さえあれば老後の心配もない。心と身体がやすらかであれば、長安に戻る必要はないのだ。

（11）同五首・其五　白居易
宦途自此心長別　宦途　此れより　心に長く別れ、
世事從今口不言　世事　今より　口に言はず。　↑（5）朗詠集618
豈止形骸同土木　豈に止だ　形骸を土木に同じくするのみならず、
兼將壽夭任乾坤　兼ねて　寿夭を将て　乾坤に任さん。
……以下略
＊立身出世とはもうお別れ。政治向きの話は一切しない。私の身体は土と木でできた人形だと思って、長生きを神仏に祈るのもやめて、運命の定めに身を任そう……

（12）白居易「潯陽春三首」・其三（春去る）　＊江州での作
一從澤畔爲遷客　ひとたび沢畔に遷客と為りて従り、　↑（1）「不出門」
兩度江頭送暮春　両度　江頭に暮春を送る。
白髮更添今日鬢　白髪　更に添ふ　今日の鬢、
青衫不改去年身　青衫　改まらず　去年の身。
百川未有回流水　百川　いまだ回流の水あらず、
一老終無却少人　一老　つひに却少の人なし。
四十六時三月盡　四十六時の三月　尽きぬ、
送春爭得不慇懃　春を送ること　いかでか慇懃ならざるを得ん。
＊江州に左遷されて二度目の春。四十六歳となった白居易は、ただしょんぼりと帰京の辞令が来るのを待ちわびている。

（13）白居易「不出門」　　＊洛陽での作

不出門來又數旬　門を出でずして来　また数旬、
將何銷日與誰親　何を将て日を銷し　誰と親しむるや？
鶴籠開處見君子　鶴の籠　開ける処　君子を見、
書卷展時逢古人　書の巻　展ぶる時　古人に逢ふ。　↑（5）朗詠集616
自靜其心延壽命　みづから其の心を静めて　寿命を延ばし、
無求於物長精神　物に求むる無くして　精神を長ず。
能行便是眞修道　能行こそ　便ち是れ　真の修道なり、
何必降魔調伏身　何ぞ必ずしも　降魔調伏の身のみならんや。

＊仏教徒（降魔調伏身）でなくとも、安穏な暮らしができる。不出門＝不出家。

菅公没後一〇〇年

（14）雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに、「少納言よ、香爐峰の雪いかならむ。」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ。人々も、「さることは知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそよらざりつれ。なほ、この宮の人にはさべきなめり。」と言ふ。

＊藤原定子（976 ～ 1001）との懐かしい思い出。（『枕草子』第二八〇段…小学館新編古典全集）

（15）雪のかきくらし降る日、ひねもすに眺め暮らして、世の人のすさまじきことに言ふなる、師走の月夜の曇りなくさし出でたるを、簾まき上げて見給へば、向ひの寺の鐘の声、枕をそばだてて、今日も暮れぬと、かすかなる響きを聞きて……

（『源氏物語』総角）

菅公晩年、大宰府での詩歌（『菅家後集』から）

（16）菅原道真「聽寺鐘　十二月十七日」　　＊太宰府での作

寺の鐘を聴く　十二月十七日（＝仏名会）

欲識搥鐘報五更　識らんと欲す　鐘を搥きて　五更を報ずれば、　＊午前四時。
三塗八難一時驚　三塗　八難　一時に驚くを。
大奇春夏秋冬盡　大いに奇なり　春夏秋冬の尽きはてて、
爲我終無拔苦聲　我がためには　つひに抜苦の声無からんことを。

＊観世音寺の鐘の声に、菅公はやはり自身の救済を祈っていた。

（17）菅原道真「南館夜聞都府禮佛懺悔」　　＊太宰府での作

南館（＝榎社）にて夜に都府の礼仏懺悔を聞く　＊これも仏名会を詠む。

人慚地獄幽冥理　人は慚づ　地獄幽冥の理、
我泣天涯放逐辜　我は泣く　天涯放逐の辜。
佛號遙聞知不得　仏号　はるかに聞こえて　知るを得ず、
發心北向只南無　発心して　北に向ひて　只だ「南無……」と。

＊南館の門前から都府楼は、大路の真北に見える。　↓「天子は南面す」（儒教の考え）

（18）参考→「只管打坐」……道元（1200 ～ 1253）『正法眼蔵』

（19）【静永訳】

「只聴鐘声」＝何も考えず（願い事はせず）ただひたすら鐘の声を聴いている。
「纔看瓦色」＝恐れ多くて、ちょこんと首をもたげて楼門の瓦を見上げ、またすぐに平伏しております。（＝京都におわす帝への遥拝）

◆◆◆あるじ無しとて――都に届け、私の「うた」

ふたたび菅公晩年、大宰府での詩歌（『菅家後集』から）

（20）菅原道真「讀家書」　家書（京都の自宅からの手紙）を読む　＊太宰府での作

消息寂寥三月餘　消息　寂寥たり　三月あまり、
便風吹著一封書　便風　吹き著く　一封の書。
西門樹被人移去　西門の樹は　人に移し去られ、
北地園教客寄居　北地の園は　客をして寄居せしむ。
紙裏生薑稱藥種　紙に生薑を裹みて　薬種と称し、
竹籠昆布記齋儲　竹籠の昆布は　齋の儲けと記せり。
不言妻子飢寒苦　妻子の飢寒に苦しむを言はず、
爲是還愁懊惱余　これが為に　還って愁へて　余を懊悩せしむ。

＊三ヶ月ぶりの家族からの手紙。京都の自宅では西門のあたりの庭木が人々によって持ち去られ、屋敷の北側の部屋（かつての道真の書斎）は、よその人が住んでいるという。生姜や昆布など（九州でも手に入る？）をこまごま手紙とともに送ってきてくれたが、手紙の中に、妻や子供たちがいかに寒くひもじい生活をしているかが一切書かれていない。その意地らしさが、かえって私の心を苦しめる。

京都の自宅（宣風坊）の植樹たちへの思い（『菅家後集』から）

（21）菅原道真「梅花」　＊太宰府での作

宣風坊北新栽處　宣風坊の北　新たに栽ゑし処、　↑菅原邸の梅樹
仁壽殿西内宴時　仁寿殿の西　内宴の時。　↑皇居の梅樹
人是同人梅異樹　人は是れ同じ人　梅は異なる樹、
知花獨笑我多悲　知りぬ　花のひとり笑（＝咲）きて　我の多く悲しめるを。

（22）菅原道真「雪夜思家竹十二韻」　雪の夜、家の竹を思ふ十二韻　＊太宰府での作

自我忽遷去　我れ　忽ち遷去せしより、
此君遠離別　此君（＝竹の異名）遠く離別す。
西府與東籬　西府（大宰府）と　東籬（京の自宅）と、
關山消息絕　関山　消息　絶えたり。
非唯地乖限　唯だ地の乖限（乖離）するのみにあらず、
遭逢天慘烈　天の慘烈に遭逢へり。
憫黙不能眠　憫黙して　眠る能はず、
紛紛專夜雪　紛紛たる　専夜の雪。
近看白屋埋　近く（大宰府周辺）看る　白屋の埋れたるを、
遙知碧鮮折　遥かに（京都）知る　碧鮮（＝竹の幹）の折れんやと。

…以下略…

（23）「検繋」の意味するものは？――前掲（2）柳澤良一著書の語釈による。
『妙法蓮華経』第二十五「観世音菩薩普門品」（一般に『観音経』という）
設復有人、若有罪、若無罪、杻械枷鎖、検繋其身、称観世音菩薩名者、
皆悉断壊、即得解脱。
＊（岩波文庫＝坂本幸男・岩本裕訳注による）「あらゆる方角に顔を向けたほとけ」
罪がある場合にせよ、罪がない場合にせよ、もし誰かが木製あるいは鉄製の
足かせとか係蹄とか鎖とかで繋がれることがあっても、かの偉大な志を持つ
求法者アヴァローキテーシュヴァラの名を聞けば、直ちに足かせや係蹄や鎖
などは解けてしまうであろう。偉大な志を持つ求法者アヴァローキテーシュ
ヴァラの威光は、実にこのようなのだ。

（24）【静永訳稿「（菅公）不出門」詩】
左遷され、草深い田舎であるここ九州大宰府に着いて以来、帝に対する万死に当たる不敬に、あらためて恐れ入っております。都督府の楼門に向かって拝礼しても、首をちょこんともたげ、屋根瓦が目に入った途端に再び平伏し、観世音寺の梵鐘を耳にしても、もはや我が身の救済は願わず、ただじいっと無念無想で聞き入っております。
かの白楽天と同じように「門を出でず」、ずっと南館におりますが、空にぽっかり浮かぶ白い雲を見上げては、心は遠く都へと思いを馳せ、夜の満月を望んでは、これも都を照らす同じ光なのだと思い、慕わしく眺めております。この地では慈悲深い観世音菩薩の法力で、我が身を拘束するものは何もありません。私は、もはや一歩たりとも外出する必要はないのです。

＊都におわす天皇への変わらぬ忠誠。　不外出　＝不出家・不帰京・不結党。

菅公没後一〇〇年
（25）「流され侍ける時、家の梅の花を見侍て」　贈太政大臣
東風吹かばにほひ起こせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな
〔花山上皇（968～1008、天皇在位984～6）『拾遺和歌集』巻十六「雑春」・一〇〇六〕
＊菅公の「太政大臣」追贈は正暦四年（993）

菅公没後三〇〇年
（26）「古郷の梅をよみ給ひける」
東風吹かばにほひ起こせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ　〔平康頼『宝物集』巻二〕
＊康頼は後白河院の側近、「鹿ヶ谷の陰謀」（1177）に加わり、薩摩鬼界ヶ島（硫黄島）に流罪。出家して性照と号す。翌年赦免されて帰京する。

菅公没後一〇〇〇年
（27）その夜、上のいとなつかしう昔物語などし給ひし御さまの、院に似たてまつりしも恋しく思い出できこえ給ひて、「恩賜の御衣は今此に在り」と誦じつつ入り給ひぬ。御衣はまことに身はなたず、かたはらに置き給へり。　〔『源氏物語』須磨〕
＊光源氏のモデルの一人に道真公が確かに存在する。

【付録資料】「不出門」詩を中国語で読むと……

○…平声　／　●…仄声　／　△…押韻

＊カタカナ・旧読……当時の中国語の発音が現代と大きく異なる。

（28）　不出門　　bù chū mén　　門を出でず　　菅原道真（八四五～九〇三）

一　従　謫　落　就　柴　荊　　ひとたび謫落せられて柴荊に就きて従より

○　●　○　△

yī（イチ）cóng zhé（タク）luò（ラク）jiù chái jīng

萬　死　兢　兢　跼　蹐　情　　万死　兢兢　跼蹐の情

●　○　●　△

wàn sǐ jīng jīng jú（キョク）jí（セキ）qíng

都　府　樓　纔　看　瓦　色　　都府楼は　纔かに瓦の色を看

●　○　●

dū fǔ lóu cái kān（旧読）wǎ sè（シャク）

觀　音　寺　只　聽　鐘　聲　　観音寺は　只だ鐘の声を聴くのみ

○　●　○　△

guān yīn sì zhǐ tìng（旧読）zhōng shēng

中　懷　好　逐　孤　雲　去　　中懐は　よく孤雲を逐ひて去り

○　●　○

zhōng huái hǎo zhú（チク）gū yún qù

外　物　相　逢　滿　月　迎　　外物は　満月に相逢ひて迎ふ

●　○　●　△

wài wù（ブツ）xiāng féng mǎn yuè（ゲツ）yíng

此　地　雖　身　無　檢　繫　　此の地　身の検繋せらるる無しと雖も

●　○　●

cǐ dì suī shēn wú jiǎn jì

何　爲　寸　歩　出　門　行　　何為れぞ　寸歩も　門を出でて行かん

○　●　○　△

hé wéi cùn bù chū（シュツ）mén xíng

（終）ありがとうございました。